

Vol.2

意識から放たれ空を漂う“それ”は、心を紡ぐ物としては限りなく頼りない。普段、私の日常で在る時、ふとそうした感覚に没する。然し乍ら、それはまた当然のように他者にも見られる。あたかも蜘蛛の糸のように廻らされた“それ”は、無為の心のまま繊細に繋がりを求める。

こうした漂うものに触れられた時、それはとても心地の良い、隔たりのない透き通った柔らかな一つの心として溶け込まれる。日常はそうした変哲の無い積み重ねで出来ている。

2021年 2月23日 近江楽堂
工藤 煉山

1. Prologue

いつもの始まり

2. 虚霊 Kyorei

心は空虚な身体から放たれるのか。

はたまた魂というものから放たれるのか。

少なからず“それ”は私の身体を通過して、空虚な心も通過して、空に音を漂わせる。

無為の心は、静かに流れる。

遥かに深層の“それ”は一人の心で出来ているものではない。

生死の積み重ねの溝にできた幾十もの欠片で成形された“それ”は、

他者の心と身体をも通過して繋がりを求める。

この現世での心の縁のもとに。

3. 霧海篋 Mukaiji

私は大海原で濃霧に吞まれ、一寸先は何も見えない状態である。

波に身を委ね、無心で尺八を吹く。

海鳥のように、または生まれたての赤子のように。

浜辺にいる者は、そうした得体の知れない音に聴こえたかも知れない。

意図とは常に自身の思惑とは異なり、他者の心に反映されるものである。

そして、そうした偶然的必然が、“それ”を呼び起こさせる。

4. 心月 Shingetsu

「心月孤円 光呑万象」

心とは何か。

万象とは何か。

この世に明確なものなど一つも存在しない。

もし在ると言い切れるのであれば、それは人の傲慢さに他ならない。

生きとし生けるものは何の理由もなく、存在しているのだから。

そして常に複雑なものである。

安易にわかりやすくする事は、私にとっては、まだまだ、とても烏滸がましい行為である。

5. 三谷清攬 Sanya Seiran

自然を制覇したと酔いしれる人間よ。

それが、どれだけ浅はかな行為か知っているであろうか。

自分に喜びを与えるのではなく、

他人に喜びを与えるのではなく、

自然に喜びを与えよ。

もっと感謝せよ。

そうすれば、繰り返される些細な四季の変化だけであっても、心は十分である。

多くを求めず、じっくりと生きよ。

大切なものは、いつも手の届く範囲にあるものだ。

6. 回向 Eko 工藤煉山 作曲

心は穏やかなままで過ごす事は出来ない。

生きる事は荒々しい。

それが活力であり、一つの道標でもある。

日々、一日の終わりに、今日はどれだけ苦しんだか自問自答する。

生きる荒々しさの先に初めて安らぎを知る事ができる。

もし、あなたが安らぎを必要としているのであれば、

より一層苛まれる事だ。

7. Epilogue

一つの終焉



LENZAN ART Production